



安中市男女共同参画推進委員会委員
太田 琢雄

「違う」を大切に。

異文化理解のプロセスでは珍事がよく起こります。日本と海外の学生たちの交流促進を長年続けるNPO法人国際比較文化研究所が、2007年にはじめてマラン(インドネシア)で交流事業をした時の話も印象的です。初日の行程を終え、午前9時集合の約束で参加者たちは解散。翌朝、日本人参加者は全員9時に集まりましたが、マランのメンバーは誰ひとり現れません。慣れない異国で不安も募る中、マラン勢が登場したのは1時間後。日本人学生たちは、遅刻を謝りもしない彼らに不信感を抱きます。そうでしょう。日本では5分前行動が合言葉になるくらいですから。しかしその後、共に時間を過ごし語り合うことで、不信感は異文化理解に変わったそうです。「時間の物差し」が違うのだ、と。異なる尺度で彼らは各々9時の約束を守っていたのです。それを機に彼らは互いの時間軸を理解し、譲り合うようになったとのこと。両者の絆は15年経った今も続いています。不信感で終わらず良かったなと思います。

男女共同参画が目指すところは、人々の多様性や

困市民課市民協働係(☎内線1027)

多様な選択肢を認める社会の実現だと思います。私たちはアンコンシャスバイアス(無意識な先入観)の塊です。自分と違うものには壁を作り、警戒し、攻撃してしまうことも。この課題に取り組む方々が口を揃えておっしゃられることに、毎回はっとさせられます。「大切なのは話を聞くこと。耳を傾けること。」確かにそれが、自身の先入観や無知さを吹き飛ばす最速の方法かも知れません。相手の時間の物差しを知った学生たちのように、互いの真意を知れば、それだけで世界は少し平和になりそうです。

2月に安中市が開催した男女共同参画推進講座にて坂本祐子先生は、「性差」や「男女の脳差」よりも、私たちが大切にすべきは「個人差」だとおっしゃられました。個人差を尊重しあう。それはマニュアルやルール作りよりもっと手前のところにある、人の心の相互です。不器用な私たちですから、全て理解し合うことはできないかもしれません。でも「自分と人が違う」という大前提くらい覚えていられるはず。「違うのだから、知ろう。」と意識し耳を傾けることはきっとできるはずです。

消費生活センター からのお知らせ

粗品をきっかけに通っていたら、 2か月間で500万円の契約

— 事例 —

「商品の宣伝を聞いて無料で商品がもらえる」と知人に誘われ会場に出かけた。販売員の話が楽しく何度か通っていたら、2か月の間に、布団や磁気治療器、下着などの購入を次々に勧められ契約してしまった。自分



イラスト：黒崎 玄

だけ小部屋に呼ばれて勧誘されたり、「あなたのため」などと言われたりして、断りきれず買ったこともある。購入時は頭金の支払いだけなので、高額だという意識はなかったが、「場所を移転する。残額を支払って」と言われ初めて、総額が500万円以上だと分かった。生命保険を解約し、貯蓄と併せて支払った。商品を返品するので返金してほしい。

— ひとこと助言 —

- ☆「粗品がもらえる」「販売員の話が楽しい」などの雰囲気にはひかれて、数か月も会場に通い続け、その間に次々と高額な商品を契約させられてしまう、新たな手口のSF商法(催眠商法)の相談が寄せられています。
 - ☆個別に声をかけられ勧誘を受けると断るのが難しくなります。粗品や楽しい話につられて会場に近づかないことが第一です。
 - ☆長期間通い続けることで販売員との間に親しい関係性が構築され、断りにくい心理に陥ります。販売員の親切は契約させるための手口です。家族や周りの人も気を配りましょう。(国民生活センター「見守り新鮮情報」第223号から作成)
- 問市消費生活センター(☎382-2228)
相談日時▶月～金曜日(祝日を除く)午前9時～午後4時30分